

観音物語 (19) 四苦八苦の人生

しゅじゅしよあくしゅ じごくきちくしよ しょうろうびょうし く いぜんしつりょうめつ
種種諸悪趣 地獄鬼畜生 生老病死苦 以漸悉令滅
もろもろ ぜん
種種 諸 の悪趣 地獄 鬼 畜生 生老病死の苦 漸を以って悉く滅せしむ

もうすぐ生まれてくるお腹の子は大丈夫なのだろうか？ 五体満足で生まれてくるのだろうか？ 健康な子が授かりますように…。お腹をまん丸にふくらませた赤ちゃんは家族みんなの心配の種であり、希望の話題である。

「観音さま、どうか安産子安でありますように…」

オギャー！ オギャー！ オギャー！ オギャー！

元気な産声が廊下に響く。孫六人目の誕生を喜びあった。目鼻が整い、小さな白い手を握りしめて元気に泣いている。なかなかの美人だ！ これまでの不安が笑顔に変わった。これからは乳の心配をしたり、夜泣きに悩まされたりしながら、すくすく育っていくのだろう。

この愛娘が三歳になつときに高熱を出した。下痢と嘔吐が激しいインフルエンザであった。五日間も熱が下がらない。幼い脳に熱がこもらなければいいが…。入院して手当を受けているが、ぐったりとしたままである。

「観音さま、どうか病気が治りますように…」

娘は退院して笑顔がもどった。女の子はよく喋る。今までは水を打ったように静かでつた家の中が、娘のお喋りで急に明るくなった。

幼稚園に入り、小学校に通い、友だちも沢山できて楽しそうである。ときどき喧嘩をして泣きながら帰ってくることもあるが、朝になればランドセルを背負って行く。ところがどうしたことだろうか、中学生になった春、突然のように学校へ行かなくなってしまった。思春期の登校拒否である。部屋に閉じこもり日々が続いた。家の雰囲気も暗い。

「観音さま、どうか娘が学校へ行けますように…」

ときどき友だちが家を訪ねてくれた。部屋でなにやら賑やかに喋っている声もれてくる。その友だちに娘の気持ちを聞いてみた。どうやら両親はいつも兄を褒めていたことが原因のようであった。親は無意識のうちに秀才の兄と妹を小学校のころから比べていたのである。そのために娘は劣等感に陥ってしまったようだ。親は反省した。登校拒否は三ヶ月ほど続いたが、やがて明るい顔がもどり、二学期から学校へ行くようになった。

大学を卒業したが、なかなか就職がきまらない。しばらくフリータで過ごしていたが、両親は娘を責めるようなことはせずに、のんびりと自由にさせた。

「観音さま、どうか娘が就職できますように…」

やっと三年目の春、医療関係の会社に就職して落ち着いた。そして八年が経過した。

「観音さま、どうか娘が結婚できますように…」

「観音さま、どうか娘に子が授かりますように…」

「観音さま、どうか孫の入学試験が合格しますように…」

九十九才の祖母はベッドで手を合わせます。

「観音さま、長患いをせずにぽっくりと往生ができますように…」